



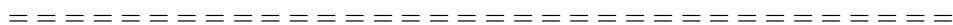
地域日本語支援ニュース こだま 第 255 号

2014.5.22



★—メールマガジンをお読みいただき、ありがとうございます—★

【地域日本語支援ニュース こだま】は、日本語教育に関する事業を全国で行っている公益社団法人国際日本語普及協会(AJALT)発行のメールマガジンです。各地域で在住外国人に対する日本語・生活支援に携わっている方々に役立つ情報の共有を目指していきます。



■ともに生きる■

ロゼリーさんに聞く

～日本で暮らして 25 年 子どもを高校進学させて、いま～

1990 年、入管法の改正で日系人が労働ビザを取得できるようになり、多くの日系 2 世、3 世が来日しました。サンパウロの大学で心理学を学んでいたロゼリーさんもそのおひとりです。日本での豊かな生活を夢見て、大学を中退し 19 歳で来日しました。あれから四半世紀、日本で結婚、出産し、働きながら懸命に子育てしてきたロゼリーさん、今春、娘さんが、埼玉県の高校に進学しました。

-----☆☆☆☆☆☆☆☆

—— おめでとうございます。高校進学はどのように乗り越えられましたか。

とてもとても大変でした。一人で子育てしていますから、A 高校に合格はしたものの経済的な問題でとても入学させることはできないとわかりました。でも進学を考えていた B 高校の入試には失敗してしまい、どこにも入れないという事態になってしまったのです。入学手続き締切日の前日、ボランティア日本語教室の方から、返済面で優遇される奨学金の情報をもらい、ようやく「進学させる」決心がつき、手続きに行きました。本当にもう一日遅かったら、娘は高校生になれなかったと思います。

—— 特に大きな壁となったのは何ですか。

正確な情報がないことです。生活情報については市役所などの翻訳版があり、小学校、中学校生活のことも大体理解できました。担任の先生がルビをふってくれました。でも高校進学については漢字だらけのお知らせを娘に読んでもらって、私は理解したつもりでしたが、正確には解っていませんでした。

娘は塾に行っていないのでそういう方面から情報が入ることもなく、入試の合格ラインや入学の際や入学後にかかる諸費用なども解りませんでした。正しく進学先を見極めるためにも進学や奨学金について、詳しい翻訳版がほしいと思います。

—— 日本の小中学校に通わせる中で印象に残ったことはありますか。

日本の小中学校では皆、持ち物が同じだということですね。ブラジルでは服装も、持ち物も様々で、子どもたちはその違いを直に見ながら育つことで、社会というものを知っていくのだと思います。社会は皆が違っていてジャングルのような場所です。日本の学校にいと、社会でもそのまま、皆同じだと思うかもしれません。学校で皆違うということを知れば、社会に出るときに、覚悟していけると思います。

—— ロゼリーさんはいつも前向きですが、その原動力はどこからくるのでしょうか。

困ったときでも「何とかなる。前に進むしかない」と言い聞かせてきました。これは子どもを育てる中で学んだことです。一人で子育てしていくことになり、責任感でいっぱいでした。精神的にも余裕がなく小さかった子どもに八つ当たりなどして、そのことでとても心を痛めました。悪いのは自分ですが、振り返らないで進むしかありません。子育て以外でもそう思ってやってきました。日本語での会話では、自分から相談するというよりも、普段の会話の中で耳にしたことが参考になったり、会話の中の言葉に癒されたりと、困ったときは人と会話することで助けられてきました。

娘も、高校進学は自分の道を見つけるため、社会で自立して生きていくためだと言っています。来日して25年間、これまでと同じように、これからも、前に進むしかありません。子どもたちと前を向いて歩いていきます。

(聞き手 公益社団法人国際日本語普及協会 松尾恭子)

☆ 皆様からのご感想をお寄せください。☆
